『比叡』読解のこころみ（一）

井上三朗

目次

一　はじめに
二　人間的な愛への執着とそれとの訣別
三　藤木俊子から俊瑛へ
（1）出家を決意した俊子と、出家のその他の理由
（2）得度式以後
（3）比叡での寵山
四　愛と宗教とのかかわり
（1）南条真潤の場合
（2）俊瑛における肉体への意識
（3）俊瑛と〈男〉との関係
五　おわりに

（太字は今回掲載分）

一　はじめに

瀬戸内晴美の『比叡』は昭和五十四（一九七九）年九月に、書き下ろし長篇小説として新潮社より刊行された。瀬戸内晴美はこの小説の上梓に先立つ、約六年前の昭和四十八（一九七三）年の十一月十四日に、奥州平泉の中尊寺で出家得度している。『比叡』はこの得度体験ならびに、それにつづく、比叡での二ヵ月に及ぶ籠山の体験から取材しており、晴美にとって得度＝回心が何であったかをうかがううえで、言いかえれば、晴美が寂聴となる過程を理解するうえで、看過できない重要性をはらんでいるように思われる。

『比叡』は、作家の藤木俊子をヒロインにし、この藤木俊子が得度を経て、俊瑛となり、自己の信仰を確立していく過程を描いている。全体として八章から成る。第一章では、出離の日から二年余り経過した頃のことが物語られ、そのあと、得度の日の三日前に、京都の松波教授から、苦労して色を出した着物が東京に届けられたことが顧みられる。第二章以下は、この日以後のことが順を追って

回顧されていく。すなわち第二章において、同じ日の夜の〈男〉とのやりとり、第三章では、上野から東北行きの列車に乗った俊子の内面と、中尊寺での得度式の有り様が語られる。第四章と第五章では、得度式が終わって、幼なじみの幸江の別荘にタクシーでたどり着いてからのこと、第六章では、得度より百日から半年後の、京都の家での生活が、第七章・第八章では、比叡での寵山の模様が叙述される。このように、第一章の終わりあたりから、得度の直前より比叡での寵山までの経緯（いきさつ）が、時間順に回想されている。しかしながら、この回想の時間の合間に、それ以前の過去、いわば大過去の時間が挿入されていて、物語は必ずしも直線的に進行していない。過去と大過去の時間が錯綜しながら、作品は繰り広げられており、複雑な時間構造を有している。

ここで、どのような観点から、『比叡』を取り上げるかを述べておこう。この小説は女主人公藤木俊子の得度＝回心を軸として展開しているけれども、俊子には長年来付き合っている愛人の〈男〉がおり、宗教的なものは恋愛的なものとのかかわりで扱われている。私は、人間的な愛が宗教とどのようなかたちで関係するのかを最終的に論考する目的で、『比叡』の読解をこころみたい。この目的のために、最初に、藤木俊子が出離を決意するに至るまでの事情を明らかにする。そして俊子の出家がまずもって、人間的な愛、男（たち）との訣別を意味することを論じるだろう。次の章では、出家する決心をした俊子が得度式、比叡での寵山を経て、俊瑛に生成していく過程をたどる。合わせて、出家のその他の理由をはじめに指摘しておきたい。そのあと、愛と宗教との関連性をいよいよ考究する。叡山の行監である南条真潤の場合を一瞥したあと、俊瑛における肉体への意識を問題にし、それから俊瑛と〈男〉との関係を検討することによって、彼女において、愛と宗教とが対立しているのか、それとも両立しているのかを明確にしたい。

二　人間的な愛への執着とそれとの訣別

小説『比叡』の世界は愛欲の世界である。作品の冒頭、藤木俊瑛は得度後、二年の歳月が流れたある日、東北の片田舎に住む七十歳の老婆から、次のような手紙を受けとる。

「にくうて、にくうて、よめをころすことばかりかんがえつめる。むすこのせんしのこうほがはいるまえから、わたしのおっとをぬすんできたちくしょです。このままでは、むねがやけてきがくるう。おたすけください。がっこもでず、じもしりません。いのりころしてください、おたすけです」（六頁）[1]。

この手紙には、戦死した息子の嫁に夫を寝とられた老婆の怨念が書きこまれている。夫を息子の嫁から取りもどすために、老婆は嫁を呪い殺したいほど憎んでいる。老婆の、執念と化した愛欲が見てとれる。

作品第六章において、俊瑛は後深草院二条の生涯に思いをはせて

いる。二条は後深草院の寵い者でありながら、次々と新しい男と関係をもった。まず幼なじみの西園寺実兼と密通して子を宿した。院の実弟の阿闍梨にも身を許し、さらに時の太政大臣藤原兼平とも情交を重ねた。このように、二条は少なからぬ男たちと肉の交わりを結び、愛欲の世界に生きた。作中、この後深草院二条のことは、約七頁にわたって言及されている。

藤木俊子の幼なじみである幸江のことにも触れておきたい。幸江は、俊子の父親が昵懇にしていた芸者愛之助の娘である。幸江は女学校を卒業して二年めに、県庁勤めのサラリーマンと結婚する。けれども、「終戦の翌年、どこでどう識りあったか、焼跡の復興工事に来ていた他国者の岩倉と、駈け落ちしてしま」（一四四頁）い、物語が始まったときには東北に在住している。幸江の駈け落ちからは、彼女の愛の欲望のはげしさが窺知できる。

夫を息子の嫁にうばわれた老婆、多くの男性と関係をもった後深草院二条、それに駈け落ちした幸江がそうであるように、『比叡』に出てくる人物たちは、愛の欲望に支配された人びとである。ヒロインの藤木俊子も、例外ではない。俊子が出家する決心を固めるまでに、どのような経歴をたどってきたかを概観することにしよう。

藤木俊子は戦時中、結婚して北京に移り住む。ところが夫は「現地召集で突然応召」（一六頁）し、「赤ん坊をかかえた彼女は、明日の暮しにも困」（一六頁）るようになる。幸い、知り合いに柯夫人がいた。柯夫人は日本人であるが、中国人の柯氏に嫁いだ人である。この夫人の世話で、俊子は日本から持ってきた着物を金に換えて、生活上の困難さをしのぐ。戦争が終わり、その翌年、俊子一家は「大陸から着のみ着のままで引き揚げ」（四九頁）、「焼跡にバラックを建てていた俊子の実家に転がりこみ、そのまま、あてもない居候暮し」（四九頁）をすることになる。昭和二十二年、夫は東京に出て、職を見つける。だが俊子は、「別れていただきたいんです」（四九頁）と言って、夫に離婚を申し出る。作中、なぜ俊子が離婚を希望するのか、何も説明されていない。夫の反応も伝えられていない。ともあれ、これで離婚が成立し、幼い娘は夫にひきとられる。俊子は単身で上京し、小説家への道を歩むことになる。

と同時に、俊子は数々の恋を体験し、男性遍歴を重ねる。離婚後の恋の相手は、「ほとんど家庭を持ってい」る（五四頁）。しかし俊子は「他人の家庭を壊す気持にはなれな」い（五四頁）。「どんなに気の合う相手であっても、家庭という檻の中に置いて想像してみると、別れた夫と同じように見えてくる」（五四頁）からだ。俊子にとって、「家庭」というものは、自分を閉じこめ、自由をうばう「檻」、換言すれば、牢獄に等しい。「男との濃密な充ちたりた時間の後では」、「ひとりの時しか味うことの出来ない完全な自由さのくつろぎが、全身をほとびさせてくるのを認めないわけにはいかなかった」（五四頁）と語られているように、俊子は、恋する男と始終いっしょにいることの束縛感・不自由さよりも、濃密な情事のあとの「ひとり」であることの自由さを好み、その「自由さのくつ

ろぎ」を満喫するのである。

もっとも、二十代や三十代のときには、俊子は恋する男の家庭のことが気になり、「男の家をつきとめ、そうすることで、傷つくのは自分だと承知しながら、性こりもなく、繰りかえし、ひそかに男の家に近づいていった」（四〇頁）。けれども四十代に入ると、「これまでの恋のように、相手のすべてを識りつくそうとする気構えを捨て」（四〇頁）、文字どおり不倫の恋を楽しむようになる。とはいえ、「遠い昔、家庭を捨てて以来、二度と結婚生活を繰りかえしたいとは思っていない俊子は、どの男の場合も自分からは結婚を望んでいな」い（四〇－四一頁）。俊子は若い頃も、年とってからも、結婚願望をいだかない。年齢によって男との接し方がことなるにせよ、俊子はいつも恋愛と結婚とを切り離し、結婚に結びつかない愛を追求してきた。それはなぜか。すでに見たように、俊子が一人であることの自由を尊重しているからである。だがもうひとつの理由として、俊子が情熱を、もしくは情熱の燃焼を重視していることが挙げられるのではないだろうか。作中、「男に家庭よりも自分を選ばせる自惚れもあった。そのくせ、結果的には、俊子の方がいつでもその関係を破壊し、終りは全うしていない」（四一頁）と書かれているごとく、俊子はいつの場合でも、自分のほうから恋愛関係を清算し、男と別れてきた。俊子がそうするのは、情熱が燃焼しなくなったからであろう。俊子は、情熱が燃え上がるかぎりでしか、男と関係をもたないのだ。

四

俊子が出家を決断する折、彼女は一人の男と親交を結んでいる。名前が与えられていないその〈男〉とは、長年来の付き合いである。作品のなかで、俊子が〈男〉と知り合ってから、「十年近い歳月がつづいていた」（三二頁）と顧みられている。[2] 俊子はあるときその〈男〉に、「情熱の衰えきった関係なんてがまんできないのよ」（五八頁）と言いはなっている。ある意味で、ほんとうの愛は、情熱が燃えさかっているときではなく、情熱が一定のおさまりを見せたときに芽生えるといえる。なぜなら情熱とは、自己本位の感情であり、そのような情熱に支配されているかぎり、他者への真実の愛は発生しないとみなされるからだ。しかし俊子は情熱に至上の価値を置き、情熱の衰えに承服することができない。俊子は〈男〉に、「情熱を束縛するようなものなら、何だって抵抗してひきちぎってしまいたくなる。死んだって抵抗する」（五八頁）とぶちまけている。俊子は、「情熱の火を束の間でも長びかせたいため、あえて同棲をさけ、たまの逢う瀬の燃焼に心身を焼き尽すことの方を選」ぶ（五九頁）。「わたしは、相手の情熱の衰えをがまん出来ない以上に、自分の情熱の衰えるのが承知出来ない。ですからその予兆をみてとるが早いか、自分で水をかけて火を消し去ってしまう」（五九頁）とも彼女は話している。俊子は情熱至上主義者であり、情熱を奔放に生きることを切望している。

ここで、俊子が出家する時点で関係をもっている〈男〉について、少し言及しておきたい。〈男〉は古美術の商いをして生計を立

てている。もちろん〈男〉には家庭がある。[3] 前述のように、俊子が〈男〉を知ってから「十年近い歳月」が流れているが、そのかん、二人は順風満帆に愛の関係を維持してきたわけではない。即座に別れてもおかしくないような危機的な状況に置かれたこともあった。作品第六章では、得度し、比叡への入山をひかえた俊瑛が、「思い出したくない時」（二一五頁）として、〈男〉とベッドを共にしている場面を記憶に甦らせるところがある。その場面において、〈男〉は、「俊子のくすぼりきった憤懣をたった今終えたばかりの性戯で押えこみ、なだめ得たと思っている」（二一五頁）。終わったばかりの性行為は、「俊子のくすぼりきった憤懣」という言い方からうかがえるように、よろこびも幸福感もともなわない。〈男〉は部屋を出る時を見はからっている。二人の性の交わりは新鮮さをうしない、惰性的なものと化す。「歳月に風化し馴れあい、頽廃に近づく関係がもつれながらつづいていた」（二一六頁）との認識が示されている。二人がいっしょにいるとき、〈男〉の「苛立ち」（二一五頁）と俊子の「不機嫌」（二一五頁）とが衝突して、よく「別れ話が出され」た（二一六頁）。だがその度に、「受ける方がはぐらかしてしま」っていた（二一六頁）。二人は、「腐りきった糸が自然に力つきて切れるのを待つ」（二一六頁）という状況におちいる。二人の関係は末期的な様相を呈する。ついに俊子は〈男〉に、「もうだめね。わたしが他の男と寝ているってことさえ、あなたは気づかなくなっている」（二一六頁）と知らせる。この言葉は、二人の愛の破局を宣告したものとうけとれる。

この宣告にたいして、〈男〉はどのように反応するのだろうか。ベッドの中で〈男〉は身動きする。俊子は「とっさに、自分の裸に飛んでくる男の掌を思い、反射的に全身をひきしめ」る（二一七頁）。けれども〈男〉は俊子の予想に反して、暴力に訴えるのではなく、「悪かった」と謝罪し、「そこまであんたを追いつめていて捨てておいたのはおれの……」と言いよどむ（二一八頁）。このあと〈男〉が「罪といったのか、責任といったのか」、俊子には「聞きとれな」い（二一八頁）。ともかく〈男〉はあやまり、二人の愛の関係が破綻したのは自分のせいだと認める。俊子は〈男〉の言葉を耳にして、「昏い深い海底から徐々に浮び上るのを感」じ、「浮遊する全身の軽さ」を覚える（二一八頁）。俊子が浮遊感を味わうのは、自己のうちに鬱積していた不満や憤懣を〈男〉がまともにうけとめてくれたからである。このあと、〈男〉は「帰るよ」「当分……来ない」（二一八頁）と言いのこして部屋を立ち去る。俊子は、「もうこれっきり男が決して来ないだろう」（二一八頁）と予測する。しかし実際はそうはならず、十日後に電話があり、一ヵ月後に〈男〉の来訪があり、「その後、それまでの男との歳月よりも更に長い歳月がふたりの上に降りつもってい」くことになる（二一八－二一九頁）。俊瑛は、「すまなかった、という男のあの低い声を聞かなかったとしたら、今の俊瑛があっただろうか」（二一九頁）と自問している。〈男〉の謝罪が、〈男〉との関係を継

続させるとともに、現在の自分をももたらしたと、俊瑛は振り返っている。

次に、俊子と〈男〉との関係のもち方について略述しておこう。〈男〉は「前触れなく不意に訪れる」ということはない（三三頁）。それは、「物を書くという仕事」をもつ俊子の生活への配慮からというより、「ふたりの秘密をどこまでも維持しつづけたい男の側からの要心深さのせい」である（三三頁）。俊子は「男の到着する時間を見はからって、すでに迎えている客」を帰したり、「約束ずみの客の訪れ」を「断わっ」たりする（三三頁）。「男の訪れ」は、「男の一方的な都合によって」なされており、俊子は〈男〉を迎えるために、一人で「時間のやりくりの苦労」をする（三三頁）。だが俊子はそのことに「格別の不満」をいだいていない（三三頁）。

〈男〉の訪問は次第に頻繁ではなくなる。けれども当初は、毎日電話をかけてくる。俊子は「男の電話に縛られ」、「部屋から廊下に出ることもためらわれ」る（三四頁）。俊子は〈男〉の生活のペースに翻弄され、彼女の生活は〈男〉からの電話の声に支配される。しかしその電話も隔日になり、三日に一度になり、そして五日に一度になる。とはいえ、だからといって、俊子の生活はより自由になるわけではない。彼女は「以前にもまして不自由と窮屈さを味」わう（三四頁）。というのも、「電話のあった日には、少くともその後の時間は、俊子も受話器から解放される」が、「電話のない日がつづくと、俊子の神経は、終日、片時として電話のベルの音から解放されることはな」いからだ（三四頁）。〈男〉から電話がないとき、俊子はかえって「電話のベルの音」に注意をうばわれ、〈男〉からの電話を心待ちにするようになる。俊子の生活において、〈男〉の電話がいかに重要で、必要不可欠であるのかをたしかめることができる。電話の話の内容は「当たりさわりのない」ものであり、「他愛」のないものである。だが「男の声の表情や、声音の弾みぐあいから、話題よりはるかに多くの、無限に深い会話をかわしでもしたような充足感が残され」る（三四－三五頁）。俊子は〈男〉の声を聴くことによって、「充足感」を得る。これは生きることの〈充足感〉でもある。〈男〉の電話は、ということはすなわち、〈男〉の存在はなくてはならないものと化すのだ。電話でやりとりするひとときが重要性をもちはじめるのは、二人が危機的な状況を迎えるより以前のことである。しかしその状況を乗り越えたあとも、〈男〉からの電話は、俊子にとって、貴重なもの、心待ちにするものとしてありつづけるのではないだろうか。俊子の生活のなかで、〈男〉の存在の重要性を確認することができる。

俊子は〈男〉との関係を保持する中で、出家への願いをいだくようになる。ある晩、俊子の部屋で〈男〉がテレビを見ているとき、彼女は〈男〉の背に向かって、「出家しようと思うのだけれど」（四三頁）と声をかける。〈男〉は「聞えなかったのかと思うほどの間をおいて」、「普段より少し低い、平静ないつもの口調で」、

「そういう方法もあるね」と応じる（四四頁）。俊子は、「じゃ、賛成してくれたのね」「これでさっぱりしたわ」と言う（四五頁）。出家願望は「心の底に次第に澱のようにたまっていたもの」であり、「長い歳月をかけて少しずつ、そういう形をとってきた想い」である（四五頁）。しかし俊子は「今夜、それを男に告げようと計画していたわけではなかった」し、彼女じしん、「そんな決定的なことばが、ふいに口を衝いて出ることは予想もしていなかった」（四五頁）。俊子は突発的、衝動的に出家願望を口にしたとみるのが妥当である。だがそうすることで、「それまで漠然と胸中に霧のように煙っていた願望が、一挙に形をひきしめてきて、一つの決意となって、胸の底にしっかりと定着する」のを、彼女は「感じ」る（四五頁）。〈男〉は俊子に動機とか理由とかを一切たずねない。「そうするか」（四六頁）とつぶやくだけである。こうして俊子の出家の一件は、二人のあいだで決着をみる。のちに俊子は、中尊寺で得度式を終えて、記者会見にのぞんだとき、この夜のことを思い出しながら、「本当の決心はあの時成就したものだ」（一三九頁）と黙考している。俊子における出家への道は、〈男〉への告白と〈男〉の賛同を契機として開かれたのである。

俊子はなぜ出家することを望むのだろうか。〈男〉に出家への願いを伝えた日の暁方（あけがた）近く、〈男〉が帰って一人になったとき、彼女は「そういう方法もある」という〈男〉の言葉を想起し、「何を目的とした方法」なのか思索をめぐらせる（四七頁）。「ひとり身の女の晩年の生き方としての方法」「単純に老後の設計としての方法」「長くつづきすぎた情事の終り方としての方法」「余生を何かにゆだねきる方法」「ひとつの愛の昇華としての方法」「永遠に衰えない情熱を維持するために、情熱の放散を断ち、凍結するという方法」（四七－四八頁）といったように、俊子は躍起になって思案する。これらの方法はいくらか当たっている。「そのどれをとってみても」、俊子には「うなずきたくなる目的のように思われ」る（四八頁）。けれどもそのどれでもないこともまたたしかであろう。俊子が「出離への憧れ」（四八頁）をつのらせる源には、もっと別の、本質的・根源的な理由がひそんでいるのではないだろうか。「この世から出て行きたいという希いが、次第に心の底に沈澱していったのは、こうして男を送りだした後の部屋で、ひとり膝を抱いて坐り、男の残していったことばや、しぐさや、わかちあった官能の波や、訴えきれなかったぐちの名残りを、ひとつびとつ撫でさするように反芻していた時ではなかったか」（四七頁）と俊子は黙想している。男が去っていったあとの部屋で一人とり残されることは、人間的な愛への執着・未練があるがゆえに、孤独の苦しみをもたらす。家庭をもたず、同棲もせず、束の間の逢瀬のみによって愛の関係を保つことは、情熱の火は消えうせないとしても、あるいはむしろ、消えうせないからこそ、つらい孤独の深淵におちいることでもある。俊子にとって、出家とは何よりもまず、人間的な愛の関係がもたらす孤独の苦しみから自らを解き放つことである。人

間的な愛に執着しつつも、その愛を断ち切ることが出離なのだ。作品第三章では、得度式の模様が描かれているが、その過程で、「出家するとは世の煩累を絶ち、静寂の地で聖道を修することをいう」（一〇八頁）と解説されている。「世の煩累」とはこの世での心配ごとのことである。俊子の場合、それは人間的な愛にまつわることがらに収斂する。出家とは結局のところ、人間的な愛、男（たち）と永遠に訣別することにほかならない。

また、比叡での籠山を語った第八章において、次のような文章を読むことができる。

「俊瑛は仏の声を聞くのが目的で出離したとは言い難かった。現世で、仏の利益を得たいとも考えていない。もっと、心にとらわれない無際限の自由というのはないものか。他者の心ばかりか自分の心から完全に解き放たれたら、どんなにかすがすがしいだろう。永遠になどとは望まない、せめて、ある瞬間なりと、そういう玲瓏とした完全な自由の境地を覗きたかった」（二七七－二七八頁）。

ここでは、俊子の出離の目的が「仏の声を聞く」ことや、「仏の利益を得」ることではなかったことが語られている。そうではなく、「無際限の自由」をもとめて、もしくは、「自分の心から完全に解き放た」れることを切願して出家したことが述べられている。「自分の心から」解放されるとはどういうことか。俊子が解き放たれたい「自分の心」とは、地上的・人間的な愛への執着にとらえられた心ではないだろうか。この執着から解脱したとき、「完全な自由の境地」が獲得されるように思われるのである。

二　藤木俊子から俊瑛へ

出家を決意した藤木俊子は、得度式を経て俊瑛となり、比叡での籠山によって信仰を固めていく。この章では、藤木俊子が俊瑛になっていく過程をたどりたい。合わせて、俊子が出家を願うその他の理由をはじめに考察しておきたい。

（1）出家を決意した俊子と、出家のその他の理由

俊子は〈男〉に出家願望を伝え、〈男〉の賛同を得て出家することに決める。けれども、実際に俊子が中尊寺で得度式をあげるのは、一年後の五十歳のときである。その一年の猶予のあいだ、俊子がどのように生活するのかを、少し見ておくことにしよう。

俊子は、得度したあと、自分の好いたように服を着れないという理由から、洋服や着物を手当たり次第新調している。作中、「後、何年生きられるかしれない歳月に着られる可能性のあるものを、一挙に、残された浮世での時間に着つくしておこうという欲望が募ってくる」（五八頁）と説明されている。ちなみに、得度の日の三日前の夜、つまり俗世での〈男〉とのさいごの夜、俊子は、京都の松波教授が特別に仕立ててくれた貴重な着物を着て、〈男〉を出迎えている。彼女は新しい服をつくることに、「まぎれもない情熱の

確かな手応え」（五八頁）を感じる。しかしながら、新調の服を身につけた途端、「あれほど期待にときめいた心の震えもたちまち萎え、情熱のぬけがらを身にまといつけているような、さびさびした味気なさに包まれてしまう」（五八頁）。俊子はなんのよろこびも覚えず、「味気なさ」に見舞われる。世を棄てることを決心した人間にとって、この世的な栄華は、もはや魅力をもって心を惹きつけるものではなくなっているのであろう。この挿話をとおして、俊子の、この世的なものから離脱しつつあるこころの一端を覗くことができる。

俊子は出家の意思を、〈男〉以外の人物にも伝えている。まず、姉に告げる。姉は、「そんな恐しいことをどうして思いつけるの。頭を丸めるほど辛いことがあるならなぜ打ち明けてくれないの」（一〇五頁）と責める。次に俊子は幼なじみの幸江に知らせる。先述したように、幸江は県庁勤めのサラリーマンと結婚したが、岩倉という男と東北に駈け落ちした。ところが、次男が東京在住であることから、同じく東京にいる俊子と連絡をとるようになり、二人の交際が再開したのである。俊子の意向を聞いた幸江は、俊子の姉と同様に、「出家するなんて、そんな怖しいこと」と反応し、「もし、おばさんやおじさんが生きてたら、何といって悲しがると思って、そんな親不孝な怖しいこと」と咎める（一五二頁）。なぜ出家が「怖しいこと」であるのか。自伝『場所』でも指摘されているように、出家とは、「生きながら死ぬこと」[4]であるからである。人びととの関係を絶ち、自分の持ち物・財産をも棄て、この世的なものすべてに別れを告げることだからである。出家＝回心とは、魂の次元では再生を意味するとしても、肉体的なレベルでは、一種の自殺を敢行することにほかならない。だからこそ、幸江の反対を前にして、俊子は「自分がとんでもない悪事を犯そうとしているような錯覚に捕われかけ」るのである（一五二頁）。とはいえ、幸江は、俊子の決心がひるがえらないことがわかると、俊子の「この世の片づけ事の手伝い」（一五三頁）をし、出家の手はずを整えることに協力するようになる。

俊子は、幸江の母親の愛之助とも会っている。愛之助は、神戸に養子にやった息子のもとに身を寄せている。俊子は大阪の朝日座で愛之助と待ち合わせ、いっしょに文楽を観る。そのあと、二人は食事をとり、酒を酌みかわす。愛之助は、今は亡き、俊子の父親の話をする。愛之助は浄瑠璃が得意で、俊子の父親とその仲間に浄瑠璃を教えるようになる。これがきっかけとなって父親と親しくなった。愛之助と父親とのあいだに肉体関係はなかった。だが、二人の関係は疑われ、世間の噂になる。その結果、愛之助は俊子の父親の葬式にも出ることはなかった。「おとうさんのお葬式にも出んと、さぞ礼儀知らずと思うてるやろ、そやけど、あの際遠慮させてもろた方が礼儀になるような雰囲気やったものやから。それでも、毎年、毎月のおとうさんの御祥月日は、うちのお寺さんでおとうさんのため御供養させてもろてます」（一五一頁）と愛之助は弁解す

る。俊子は愛之助に、「自分の出離の計画を告げた」（一五一頁）い衝動にかられる。「父や母が生きていたら、どういうか、愛之助なら答えてくれそうな気がした」（一五一頁）からである。けれども、俊子は「出離の計画」を打ち明けない。とはいえ、愛之助はさいごに、「もう、うちも長いことないよ俊ちゃん。この年になると、もうあっちの世界の方に逢いたい人ばかりたんといて、こっちは淋しいばっかりで」（一五一頁）と言いのこす。この言葉は、この世で生きることの淋しさを吐露したものであると同時に、この世での死を選択した俊子にたいするはなむけの言葉としても読むことができる。少なくとも、早くあの世に行きたいという愛之助の願いは、この世での死を望む俊子の心の動きと照応している。愛之助は自分の意図しないところで、出家することを心に決めた俊子を励ましているとみなしうる。

俊子は出家の意思を娘にも報告している。まず、ここに至るまでの二人の関係を見ておくことにしよう。俊子が若い頃、夫と離婚し、そのことによって娘との縁が切れたことは前述した。以来、二十数年、娘とは会っていない。しかし「新婚旅行を兼ねて、夫の任地のフランスの町へ旅立とうという前日」（一三〇頁）に、娘は俊子と会うことを希望してくる。俊子は「生涯、そういう日は決してないだろう」と思いつつも、「もしあるとすれば、その瞬間こそが自分の裁かれる時だと、心の奥底で怖れ」ながら生きてきた（一三一頁）。なぜ俊子は娘と対面することを怖れていたのか。自分の産んだ娘を「捨て」、「思い出そうとも」せず、「自分だけは生ききりたい」と願って日々を送ってきたからである（一三一頁）。俊子は、「自分に捨てられた娘の歳月から目をそらせつづけてきた」（一三一頁）ことに罪の意識を有している。娘と会見し、娘がフランスに旅立ったあと、俊子は出離を告げる手紙を娘に書き送る。すると娘は国際電話をかけてきて、「どうしてそんなことするんですか」（一三二頁）と訊く。「そんなこと」という言い方は、娘にとって、母親の出離が予想もしない、意外な出来事であることを示す。またこの問いかけは、なぜそんなことをする必要があるのかという意味であるのだから、姉や幸江と同様に、娘が出家という行為を否定的にとらえていることをうかがわせる。娘は「逢わなくっても、そうしたの」（一三二頁）とたずねる。この質問から、俊子が出家を決意したのは、娘と会ってからのことであることが判明する。この事実と、出離をわざわざ知らせるというふるまいとによって、娘にたいする罪意識が出離と関係していると推量できる。娘は両親の離婚の際、自分が父のもとにひきとられたことを、別の言葉でいえば、母親から捨てられたということを、少なくとも結婚した時点においては、意に介していないように見える。けれども俊子の内心では、娘のことがわだかまり、罪悪感が醸成されてきたのである。俊子にとって、出家とは何よりもまず、人間的な愛、男（たち）との訣別である。だが同時に、娘にたいする罪意識もまた、彼女の出家に作用している。

俊子が出離を決意するに至るほかの理由を考究することにしよう。娘への思いとともに老いへの意識もまた等閑に付すことはできない。得度を三日後にひかえた夜、〈男〉が俊子のもとにやってきて、いつものようにテレビを見る。俊子はそんな〈男〉を目にしながら、自分がかつてテレビの早朝番組のキャスターをしていたことを思い起こす。彼女がキャスターをしていたのは三年余りの期間である。俊子はその頃の自分の服装の好みが「濃厚にな」（三八頁）ったと振り返り、「テレビ映りがはえるという理由」（三九頁）にかこつけて、「三十代の女でも気恥しいような派手な着物をつく」（三九頁）っていたこと、「仕事場では原色の服を臆面もなく」（三九頁）着ていたことを思い出す。俊子は、「自分の嗜好の度合が日ましに進行していくのにまかせながら、確かな足どりでしのびよっている老いの跫音から、つとめて耳をそむけていた」（三九頁）と反省している。この反省は得度式の直前の時点のものであるから、老いへの意識が五十歳の俊子の内面を支配していると判定できる。そしてこの老いへの意識もまた、俊子の出家の決断に影響をおよぼしたと解せる。なぜなら出家とは、この世において死ぬことを意味すると同時に、新たな生、同じことであるが、再生・生の蘇りを目指すことでもあるからである。

また俊子における生の疲労にも、注意を払うべきである。俊子は得度式にのぞむため、上野から東北行きの列車に乗る。その列車のなかで、彼女は極度の疲労を体感する。「自分の細胞という細胞から疲労が滲みだ」（八二頁）してくるような感覚を味わう。この疲労はたしかに、「ここ一ヶ月余り、ほとんど四、五時間しか眠らず、今日の出発のための準備になりふりかまわず没頭してきた疲れ」（八二頁）ではある。しかしそれは「五十年の疲労素」（八二頁）でもあり、ただ単に出家得度の準備に因るだけではない。俊子の疲労は、五十年間生きてきたことで積もりに積もった精神的・肉体的疲労でもある。要するに、それは生の疲労であり、一時的なものではない。俊子は、自分の「軀」が「次第に水分をぬきとられて乾き、のし烏賊のようになっていく」のを感じたあと、「十三階の窓から垂直に堕ちた死体」、「血も出ていない」死体を思い浮かべる（八二頁）。俊子は東京のマンションの十三階に住んでいるのだから、この死体は言うまでもなく、彼女の死体である。それゆえ、彼女は自分の死を想像していることになる。かくして、俊子の内心からは、生の疲労とともに、死の想念を読みとることができる。そしてこの生の疲労と死の想念もまた、彼女を出離へとうながす要素となったのではないだろうか。なぜなら、繰り返して言うように、出家とは再生・生の蘇りを目的とするからである。

俊子が出家するに至る事情について論及した。俊子において、出家とはまずもって、人間的な愛、男（たち）との訣別であるが、他の要因として、娘への罪意識、老いへの意識、生の疲労と死の想念を挙げることができる。

（2）得度式以後

俊子は奥州平泉の中尊寺において、得度受戒の儀式をうける。この寺の管長であった老師の取り計らいによって、それは実現した。俊子は「老師の許へ訪れるまでに、三、四のなじみの寺を廻っていた」（七三頁）。しかしどの住職も、俊子の出離の願いをさし迫ったものではなく、「十年先のことと解釈しようとした」ので、彼女は「充されない想いで引き下ってきた」（七三頁）。俊子は、「老師の宗派の発行している信徒対象の小雑誌に、一年間、（…）随筆が掲載された関係」で、老師とは「二、三度逢っ」ていた（七三頁）。俊子は八月の旧盆すぎに、東京の山の手にある老師の住まいを訪ねる。「出家させていただきたくて参りました」（七六頁）と俊子は切り出す。老師は俊子に年齢をたずねたあと、「いそぐんだね」（七七頁）と念を押し、出家するにあたっての障害がないことをたしかめると、「理由とか動機とか」（七八頁）を一切話題にすることなく、彼女の願いを聞き入れ、得度の段取りを決めたのである。

得度式は「啓白三宝、剃髪着衣、三帰授戒、発願勧修、回向法楽」（一一〇頁）の順番でおこなわれる。剃髪を終えて、尼僧となった俊子は、鏡に映った自分を見て、「自分の中から女臭さが追い払われたという現実」に驚くとともに、その「現実」を「奇蹟」のように感知している（一二五頁）。俊子は前日の夜、眠りにつく間際、「自分を断崖に爪先き立った姿として思い描いた」（一二五頁）ことを想起している。彼女にとって、出家得度とは「断崖」から「底知れぬ闇をたたえた海」に落ちることであった（一二五頁）。しかし俊子は、「真実、超越者があるなら、岩を蹴って宙に投じた自分を意志のままに抱きとるなり、身を砕け散らすなりしてくれるであろう」（一二五頁）と思いをめぐらせていた。剃髪した彼女は、「宙に投じた自分が、何者かに、今、確かに抱きとめられたことを、肉体的実感としてはっきりと感じとってい」る（一二五頁）。得度とは「断崖」から「海」あるいは「宙」に向かって身を投げることであるのだから、一種の死を意味する。しかし俊子は「身を砕け散らす」のではなく、「何者か」に、もしくは「超越者」に「抱きとめられた」ことを実感している。「宙に投じた自分が（…）抱きとめられ」るとは、死んで生きるということだ。俊子は得度によって、いったんは死につつも、新たな生、再生のほうに歩みはじめたのである。

得度式をすませた藤木俊子は、俊瑛という法名が与えられ、東京のマンションから、京都の「西北の端」（二〇〇頁）にある、杉野という老人の持ち家に移り住む。作品第六章では、得度してから百日が経過した頃の、俊瑛の生活が叙述されている。俊瑛は黄昏どきの西山の連山をながめながら、「透明な無為の時間」（二〇一頁）をすごす。この「時間」は「思いがけぬす早さ」（二〇一頁）で流れ去る。したがって、その時間は怠惰のむなしいひとときではなく、充実した憩いと平和の時間である。「鏡の中に、有髪の自分

の顔は、招かれなければもうとっさにはあらわれなくなってしまっている。鏡の中の僧形の自分に、有髪の自分の顔が重ならない」（二〇一頁）という記述が見られる。俊瑛は「有髪の自分の顔」を「とっさには」思い出すことができない。というより、ほとんど忘れ去ってしまっている。「鏡の中の僧形の自分に、有髪の自分の顔が重ならない」という文は、現在の自分と過去の自分とのあいだに、乗り越えがたい乖離・断絶があることを示している。俊瑛はこの世的なものに執着する自分を葬り去り、新たな人間に生まれ変わったのであろう。生きることの様々な悩みから解き放たれて、ある種の悟りの境地をひらいているのであろう。俊瑛が宗教的な救いへの道の途上にあることは疑いを容れない。

第六章において、俊瑛の生活ぶりが、次のようにも描かれている。

「出家得度という儀式を境に、捨てたものの多さより、与えられた恩寵のおびただしさの方に俊瑛はとまどっている。空の色も雲の輝きもあの日を境にまるでちがうもののように澄明になっていた。

花の咲いている間じゅう、俊瑛は飽きもせず毎朝、川沿いの桜並木の下を歩きつづけていた。桜は散る姿も華麗だった。川面を埋めつくした花びらの流れを逐いながら、ふと俊瑛は、自分の僧衣姿を忘れきっていることに気づいた」（二一九－二二〇頁）。

俊瑛は出家得度によって、「捨てたもの」より「与えられた恩寵」のほうがはるかに多かったと判断している。「与えられた恩寵」とは何か。ここでは、自然のなかで生きることのよろこびである。俊瑛は、「澄明になっ」た「空の色」や「雲の輝き」に敏感になっているし、「川沿いの桜並木」と「川面を埋めつくした花びらの流れ」をながめることに没頭している。自然の中の風景を面前にして、彼女は「自分の僧衣姿を忘れきっている」。つまり自分を忘れている。得度したことを忘却するほど、自然の風景と合体・一体化している。これは、俊瑛が生きるよろこびにとらえられていることを含意する。この引用文からは、出家得度によって生まれ変わった俊瑛の姿がかいま見える。

得度の日から半年が流れ、比叡での寵山を翌日にひかえたとき、俊瑛はこれまでのことを省察している。俊瑛は剃髪し尼となった時点から、「まだ一ヶ月とすぎていないような気」（二二九頁）がし、半年という歳月がまたたく間に過ぎ去ったような感慨におそわれる。と同時に、「自分の目の前に一枚の空気の扉」が「氷のように立ちふさが」り、あるいは「厳然とおりてきた」ような印象をいだく（二二九頁）。この「一枚の空気の扉」は「一枚の肉眼には捕えられない真空の扉」（二二九頁）とも言いかえられている。俊瑛はその「扉」が「明日からの六十日の寵山」（二二九頁）によってどのようになるのだろうかと自らに問うている。とはいえ、「扉」がどのようになるにせよ、「一度下されてしまった透明の扉は、決してもう、二度と、誰の手によってもひきあげられることはない

だろう」と俊瑛は推考し、「自由自在に扉をくぐりぬけ、蝶のように軽々と向う側とこちら側を往来しながら、扉の抵抗度が、少しずつ、少しずつ、自分の肩に抜きさしならない重さを加えてくる」のを「感じ」ている（二二九頁）。いったい、俊瑛の面前にある、目に見えない「扉」とは何か。「蝶のように軽々と向う側とこちら側を往来しながら」という言い方から察知できるように、「扉」とは「向う側」と「こちら側」とを厳然と区別し、「こちら側」を「向う側」からさえぎるもののことである。「向う側」が俗世の世界を、「こちら側」が宗教ないし信仰の世界を指すことは言を俟たない。周囲の世界は何ひとつ変わらない。しかし俊瑛は出家してから半年のうちに、俗世間とはまったく異なり、混じりあうことのない、純然たる信仰の世界を内部に築き上げた。俗世間＝外部世界とけっして融合しない、確固とした内部世界を構築したからこそ、俊瑛は自分の目の前に見えない「扉」がひきおろされたように知覚するのである。「扉」とは、俊瑛の宗教・信仰をまもる武器、ほかの誰もが侵犯することができない砦のごときものである。得度後六カ月にして、俊瑛が霊的な次元で大きな成長をなしとげたことを確認することができる。

（3）比叡での籠山

すでに述べたように、俊瑛は尼となって半年後、比叡に入山する。六十日間の修行をおこなうためである。籠山の模様は第七章・第八章で物語られている。ここで、俊瑛と同様に、六十日の籠山に加わる主要な人物を挙げておきたい。まず阿佐井寛心。伊豆の寺の息子で、次男のため一流商社に勤めるサラリーマンであった。けれども跡取りである長男が恋愛結婚をして寺を出ていったので、自分が寺をつぐことになり、比叡に入山したのである。俊瑛はタクシーで行院に向かう途中、歩いている寛心を車に乗せてやったことから、寛心と親しくなる。次に、柏木老人。明治生まれの七十二歳で、「四歳の孫を子守していて、目の前で交通事故死させてしまった」（二四〇頁）ことがきっかけとなって、出家した。入山した院生は合計三十一名であるが、尼僧は俊瑛のほかに二人いる。まず杉山妙恵。俊瑛より七歳若く、かつては横浜のホテルの美容室で働いていた。かなり耳年増であり、行監の一人である南条真潤の秘密にも通じている。自分の知っていることを「お告げや霊感」（二七八頁）のせいにする人物である。それから後藤慈芳。俊瑛と同じく大正生まれで、三人の子どもがいたのに、市役所勤めの夫を捨て、十二歳も年下の男と駆け落ちしたという経歴をもつ。この経歴は俊瑛の幼なじみの幸江のそれと似ている。慈芳は駆け落ちした男とカレーライスの店をもち、子どももうけた。しかし男を交通事故で亡くし、人生に絶望して仏門に入った。藤木俊瑛は尼僧だということで、後藤慈芳、杉山妙恵と同じ部屋で寝起きする。第七章・第八章で、重要な人物として行監の南条真潤がいる。この人物のことは、のちに取り上げることにしたい。

では、六十日の籠山での行の内容を紹介することにしよう。行は前半の顕教の行と後半の密教の行とにわかれる。顕行に先立って、三塔巡拝がなされる。「朝八時頃、横川を出発し、東塔、西塔の各堂を巡り、坂本の町へ降り、伝教大師の遺蹟や山王神社を参詣し、ふたたび山径をたどり、東塔、西塔を経て横川の行院へたどりつく」（二五二頁）のが、三塔巡拝のコースである。帰りは、「五時か六時を過ぎる」（二五二頁）。道は「ほとんど回峯行者の廻るけわしい行者径」が選ばれており、行は「難行」である（二五三頁）。俊瑛は、「外出といえば車ばかり利用していた」ので、この難行に「死ぬほどの想いをさせられ」る（二五三頁）。

さて、顕行であるが、「午前五時三十分から夜の消澄十時まで」、「びっしりすきまもないスケジュールが組まれてい」る（二四二頁）。「起床、作務、勤行、朝食、講義、正食、午後講義、夕勤行、非食、夜講義」という日程で、講義では、「天台教学と礼法」が教えられる（二四四頁）。「行院の敷地以外は一歩も出」ることはできない（二四四頁）。

三十日の顕行の最後には、三千仏礼拝がある。「午前一時半」に起床し、「二時から夕刻七時頃までかけて、過去仏、現在仏、未来仏、それぞれ千仏ずつ、都合三千仏の長い名を称えながら、五体投地の礼を繰りかえす荒行」（二五一頁）である。俊瑛はこの荒行の途中、意識をうしない、「機械的に軀が動いているだけで、自分の足がどこを踏んでいる」かも「わからな」くなっている（二九〇頁）。さらに彼女は、「軀が動いていることも忘れて」しまう（二九一頁）。そして「もしかしたら、もはや、軀は動いていないのかもしれなかった。すでに死んでいるのに気づいていないのだろうか」（二九一頁）と考えている。俊瑛は生と死の境界線上で、というより、生きているという意識を喪失した中で、三千仏礼拝の荒行を体験している。

このあと、行は密教の行に入る。午前一時半に起床し、午後八時の消澄まで、ほとんど「本堂に籠り、口に真言を称え、手に印を結び、心に仏を観想して明け暮れる」（二九四頁）のである。「朝坐、日中坐、初夜坐、後夜坐の激しい加行が終日繰り返される」（二九四頁）。その目的は「即身成仏の境地に入る」（二九四頁）ことである。この密教の行の終わりに、結願報謝の意味をこめて、再び三塔巡拝がおこなわれる。

以上が比叡での六十日間の修行の内容である。俊瑛が籠山によって、尼僧としての自己、信仰に生きる者としての自己を確立していくことは、贅言を要しない。籠山を扱った第七章・第八章において、俊瑛の内面描写はあまり頻繁にはおこなわれない。しかし第七章の、俊瑛の最澄への思いを披瀝した件りは、彼女の霊的成長を跡づける部分として注目に値する。周知のように、最澄とは、平安時代の初期に生きた天台宗の開祖である。最澄は若くして、つまり、十八歳のときに、「家庭を離れ、師友と別れ、孤独な籠山の道」（二六三頁）を選びとった。「湖畔の寺院ですごす道も当然ひ

らかれていた筈であった」のに、「ただひとり叡山にわけ入」ったのは、「南都八宗の旧権力を真向から敵に廻し、新しい宗教を打ちたてようという悲願」があったからだと、俊瑛は考量する（二六三頁）。彼女は、そのような最澄の生涯が、「愚直なほどの純粋さと、衰えを知らぬ情熱によって支えられている」（二六三頁）と判じる。そして俊瑛は最澄の出離のことを、二十九歳の釈尊の突然の出離と比べながら熟思する。釈尊の場合、青春時代に、「最澄と比較にならないほどの快楽を満喫し」た（二六四頁）。「あらゆる快楽という快楽に耽溺しきった二十九歳の男の前に、ある日、虚無の黒々とした暗い口が、残る生涯のすべてをのみつくすほど大きく黒く開いて立ちふさがった」（二六四頁）のだと俊瑛は思い描く。それにたいして、「生涯不犯と伝えられている最澄の十八歳の柔かな胸に、どんな激しい衝撃を与える事件が影を落し、孤独な籠山を選ばせたのか」（二六四頁）と彼女は問う。このあと、「今の俊瑛に辛うじて理解出来るのは、最澄が青春にしか抱く筈のないような純粋一途な情熱を、五十六歳の示寂の瞬間まで、曇らすことなく、衰えさすことなく、ひたすらに持続しつづけたという稀有な精神の強靱さだけである」（二六四頁）という記述がつづく。俊瑛は最澄の宗教的情熱、その情熱を支える「稀有な精神の強靱さ」にたいして、羨望という言葉が適切でないならば、畏敬の念を覚えている。彼女は若くして孤独な籠山を選びとった最澄に、憧憬の気持ちをいだいている。この憧憬の気持ちは、俊瑛の信仰心に胚胎する。結局のところ、最澄への思いをとおして、俊瑛が自己の信仰をより堅固なものにしていっていることが了解される。

六十日間の籠山のなかで、止観の行も無視することができない。止観の「止」とは、〈妄念を止めて心を特定の対象に集中すること〉であり、「観」とは〈正しい智慧によって事物を誤りなく観ること〉である。[5] 止観は天台宗でもっとも重視される修行のひとつである。俊瑛は、行院生といっしょに、本堂や大講堂の中だけでなく、夜、ひとりで林の中の石の上でも止観をおこなっている。すなわち彼女は、榕の大樹の下にある石の上に、半跏坐を組んで坐る。すると、「眼下の琵琶湖とその周辺の町や野の風景が一望の下に見渡」せる（二五六頁）。俊瑛は下界とのへだたりを痛感する。「まだ下界を離れて三十日とすぎていないのに、何年もそこから遠ざかっているような」印象を彼女は受け、「あのかげろうの立つ野を歩いたり、湖上を渡ったりしたのは、遠い過去世の出来事か、別の星の想い出ではなかったか」との問いを自らに発する（二五七頁）。俊瑛は、比叡に入山したのが「何年も」前のことであったかのように思い、「野を歩いたり、湖上を渡ったりした」体験が、現世での自分の体験ではなかったかのように錯覚している。俊瑛は、止観が「天地に自分をとけこませ、無になること」（二五七頁）だと思う。「自分が微塵になり、光りの中に舞う塵のひとつにとけこんでしまう」ことによって、「空々漠々の世界に自己をとき放ち、無際限の心の自由を覗く」ことを願う（二五七頁）。ついに彼女は、

「石の上で、つかの間ながら、永遠をかいま覗いたような透明な気持ちを味」わう（二五七頁）。「永遠をかいま覗」くとは、悟りを開くことである。ここにおいて、俊瑛は下界とはまったく縁を切り、いわば忘我の、あるいは一種の解脱の境地に入ったと認定できる。俊瑛は夜、ひとりで石の上に坐ることによって、「止観の醍醐味」（二五七頁）に達するのである。

俊瑛の、比叡での寵山の模様を瞥見した。彼女は寵山の体験によって、霊的な意味での成長をなしとげ、自己の宗教を揺るぎないものとする。この体験によって、藤木俊子から俊瑛への移行が完全なものになったと論断することができる。

四　愛と宗教のかかわり

このように、藤木俊子は出家得度し、俊瑛となることによって宗教のほうに向かう。では、俊瑛において、人間的な愛の問題はどのように解決されるのだろうか。俊子の出家が人間的な愛との訣別、男（たち）との訣別を意味することは、先述したとおりである。たしかに、得度後、俊瑛は長年来付き合ってきた〈男〉と性的な関係を結ばない。けれども彼女のなかで、感情的には〈男〉への愛はのこるわけで、この愛と信仰とのかかわりを測定することが、是非とも必要な検討課題となる。端的に言って、愛は俊瑛の内心で、宗教と対立・敵対しているのか。それとも両立・共存しているのか。このことを、この章で明らかにしたい。

（1）南条真潤の場合

得度した俊瑛と〈男〉との関係をしらべる前に、第七章・第八章で出てくる南条真潤の在り方に触れておこう。というのも、彼の在り方は、俊瑛における愛と宗教との関連性を論究する際、有効な比較材料を提供してくれるからである。

南条真潤は叡山の行監の一人で、声明では「指折られる名手の中に入っている」（二七八頁）。その容貌の「端整」さは、「歌舞伎の舞台の僧侶役にそのまま立たせたい」ほどであり、「青々と剃りあげた頭から顎にかけて」の「剃りあと」は、「清潔さよりもむしろみだらな感じをただよわせ」ている（二七九頁）。真潤は「院生の指導」において、「どの行監よりも熱心で手厳し」い「激情家」である（二七九頁）。「院生がいつまでも彼の思い通りの声や節を出すことが出来ないと、机を叩きつけ、身を震わして叫ぶ」だけでなく、「ぼろぼろ涙をこぼ」すまでの激情家である（二七九頁）。院生たちは、「ばんばん彼の叩きつける警策の音に震え上り、叱られていることより、四十も半ばをすぎた南条真潤が、大粒の涙を流す奇異さに呆気にとられてい」る（二七九頁）。このような真潤がもし恋愛をすれば、どれほど激烈な恋におちいるかは、想像するに難くない。作中、「あれだけの激情家が恋をすれば、どんな激しい恋に足をすくわれるかは、火をみるより明らかなことにちがいなかった」（二八〇頁）との俊瑛の推察が見いだされる。

第七章の終わりで、俊瑛は夜、林の中の石に坐って一人で止観しているとき、南条真潤が外出するところを目撃する。第八章で、彼女は同室の杉山妙恵から、真潤が「夜な夜な行院を抜けだし、芦屋に棲む女の許へ通っている」（二七六頁）ことを知らされる。その〈女〉は、「五年前の行院にきた尼さん」（二七八頁）で、「尼寺から来てたけど、住職の尼さんに追い出された」（二八〇頁）という。夜の消澄が十時で、朝の起床が五時半なので、俊瑛ははじめ、妙恵の言うことを疑う。しかしながら、夜、消澄後、どこかに置き忘れた数珠をさがしに大講堂に入ったとき、南条真潤が暗闇のなかで、本尊を前にして、慟哭しつつ念仏をとなえているのを耳にして、妙恵の話をついに信じる。真潤は次のような祈りの言葉を口にする。

「妄念はもとより凡夫の地体なり。妄念の外に別の心もなきなり。臨終のときまでは、一向に妄念の凡夫にて、あるべきぞと心得て念仏すれば、来迎にあづかりて、蓮台にのるときこそ妄念をひるがへしてさとりの心とはなれ。妄念のうちより申しいだしたる念仏は、にごりにしまぬはちすのごとくにして、決定往生うたがひあるべからず」（二八四－二八五頁）。

南条真潤は、自己を「妄念の凡夫」と規定している。「妄念」とは、〈迷いの心〉〈迷妄の執念〉[6]のことであるが、具体的には、芦屋の女にたいする絶ちがたい執着・情欲を指し示す。真潤はその「妄念」から解き放たれるために念仏をとなえる。そうすることによって、「来迎」にあずかり、「決定往生」することを念願している。彼において、愛と宗教とは相容れない。愛の情熱に支配されながらも、その愛の情熱を罪深いものと痛感している。というより、愛欲を罪悪視しながらも、その愛欲をどうすることもできない。だからこそ、真潤は往生すること、死ぬことを祈願するのである。

南条真潤の祈りの場に立ちあった俊瑛は、「深夜の山の静寂に車の音はよく響く。真潤はおそらく、その音が行院に届くことを怖れ、どこか下の道に車を止めてあるのだろう」（二八五頁）と推測する。そして「女の許に何百キロの道を往復する」（二八六頁）真潤のことを、「不動明王として即身成仏する」（二八五頁）行者と対比しつつ勘考する。ここで言う行者とは、百日間、「比叡の峯々谷々を巡礼」（二八五頁）し、山径を昼も夜もひたすら歩きつづける人のことであり、あるいはまた、「九十日間不眠不休で、立ったまま、南無阿弥陀仏を称えつづけ」（二八六頁）る人のことである。これらの行者の「一念」は「情熱という怪物に支えられている」（二八六頁）と、俊瑛は思索する。同じように、南条真潤をうごかすのも、この「情熱という怪物」だと彼女は推し量る。だが真潤を灼く「情熱の火」は「煩悩の火」である（二八六頁）。「妄念といい煩悩といい、死に至るまで凡夫の身から決して離れようとはしない魔の火のように」、俊瑛には「思われ」る（二八六頁）。「魔」とは、〈仏道修行や人の善事の妨害をなすもの〉であり、〈不思議な力をもち、悪事をなすもの〉のことである。[7]それゆえ、俊瑛もま

た、真潤にとりつき、彼を責め苛む「情熱」を否定的にとらえていることがわかる。

南条真潤は日頃の行状が災いして、行監の職を辞することになる。六十日の籠山のさいごの日、院生たちは三塔巡拝をする。俊瑛が山径を歩いているとき、皆を誘導する役を果たす真潤は、俊瑛に近づき、「私も明日山を下ります。（…）山を逐われるんです」（三〇六頁）と話しかける。真潤は、「全部、事実なのです。女のことも、山を毎晩のように下りていたことも」と告白し、「破戒無慙の醜行これに過ぎたるはなし。そういう戒告でした」とつづける（三〇六頁）。「どうなさいますの」（三〇六頁）との俊瑛の問いに、真潤は、「僧籍離脱だけはまぬがれ」たけれども、寺には入らず、「家も出」て、「広島に行って、トラックの運転手をします」と答える（三〇七頁）。〈女〉の「知人」（三〇七頁）が広島にいるので、その「知人」を頼って、〈女〉と行動を共にするのである。真潤は〈女〉との恋にすべてを賭ける。真潤において、人間的な愛への執着と宗教的な信仰とは両立しない。この二つは敵対関係にある。真潤は内心の葛藤の果てに、宗教を捨て、恋の道をえらぶ。彼の場合、人間的な愛は信仰を生きていくうえで、大きな障害になったと断定しうる。

註

（1）テクストは、新潮文庫版（平成十四年）のものを用いる。この作品からの引用文の頁数は本文で示す。

（2）別の箇所では、「おれたち何年つづいているか覚えているか」（六二頁）との〈男〉の問いに、俊子は「七年……いいえ足かけ八年」（六三頁）と答えている。

（3）作品第二章において、俊子は、自分の部屋でテレビを見ている〈男〉を目にしながら、「男の家庭で、男が家族たちとテレビに向っている図を想像」している（四〇頁）。この記述から、〈男〉には家庭があることがわかる。ただ作中、〈男〉の家族構成には何も触れられていない。

（4）『場所』新潮社、二〇〇一、二六七頁。

（5）「日本語大辞典」（講談社、一九八九）を参照。

（6）「広辞苑」第四版（岩波書店、一九九一）を参照。

（7）「広辞苑」第四版を参照。